

当院における過去3年間の血液由来 *Candida* 属菌の検出状況と薬剤感受性について

◎木下 育哉¹⁾、深田 多紀子¹⁾、繁原 矢枝子¹⁾、大崎 裕介¹⁾、武井 佑未¹⁾、山本 優¹⁾、山本 恵子¹⁾、伊藤 由美¹⁾
豊橋市民病院¹⁾

【はじめに】*Candida* 属菌は様々な検体材料から検出されるが、血液から分離される場合は臨床的意義が高く、早期に治療を開始することが必要である。また、各菌種に対する抗真菌薬活性が異なることや、耐性株の増加が報告されているため、同定検査および薬剤感受性検査を行うことは重要である。今回、当院における過去3年間に血液培養検体より分離された *Candida* 属菌の検出状況と薬剤感受性について検討した。

【対象】2016年1月から2018年12月までの3年間に、当院にて提出された血液培養検体より分離した *Candida* 属菌 54 株を対象とした。同一患者から複数回検出された場合は1検体とみなし、初回分離株を用いた。

【方法】血液培養は、バクテアラート 3D（ピオメリュー）を用い、最大6日間培養した。同定検査は Phoenix（BD）、薬剤感受性検査は酵母真菌薬剤感受性キット ASTY（極東製薬）を用いて実施した。薬剤感受性については、CLSI M27-A3 ガイドラインの判定基準を用いた。

【結果】菌種別の検出状況は *Candida albicans* が 22 株（40.7%）、*C.glabrata* が 12 株（22.2%）、*C.parapsilosis* が 10 株（18.5%）、*C.guilliermondii* が 4 株（7.4%）、*C.tropicalis* が 3 株（5.6%）、*C.krusei* が 2 株（3.7%）、*Candida sp.* が 1 株（1.9%）の順であった。fluconazole（FLCZ）では、*C.albicans* の MIC 値は $\leq 0.125 \mu\text{g/mL}$ から $1 \mu\text{g/mL}$ であり、耐性株は認められなかった。*C.glabrata* は 1 株が耐性を示し、MIC 値が $4 \mu\text{g/mL}$ から $\geq 64 \mu\text{g/mL}$ と高値であった。itraconazole（ITCZ）では、*C.albicans* は 22 株

中 19 株が感性、3 株が用量依存的感性であった。また、その他の *Candida* 属菌の MIC 値は用量依存的感性から耐性の範囲内に分布し、*C.glabrata*、*C.guilliermondii* においては共に高い耐性率を示した。voriconazole（VRCZ）では、*C.albicans*、その他の *Candida* 属菌を含むほぼ全ての株で感性であったが、*C.glabrata* において耐性株が 1 株検出された。amphotericin B（AMPH-B）では、いずれの菌種においても耐性株は認められなかった。

micafungin（MCFG）では、*C.albicans* の MIC 値は $\leq 0.03 \mu\text{g/mL}$ から $0.06 \mu\text{g/mL}$ であり、耐性株は認められなかった。その他の *Candida* 属菌も同様に全ての株で感性範囲内であった。

【まとめ】近年 *C.albicans* の FLCZ 耐性株が報告されているが、今回の検討結果では当院において血液培養検体より分離した *C.albicans* から耐性株は検出されなかった。また、他の抗真菌薬では、ITCZ で用量依存的感性を示す株が 3 株認められたが、ほぼ全ての株で良好な感性を示した。その他の *Candida* 属菌からは、*C.glabrata* で VRCZ に耐性を示す株が 1 株認められた。また、ITCZ に用量依存的感性から耐性を示す株が各菌種で複数認められ、*C.glabrata*、*C.guilliermondii* においては共に高い耐性率を示した。

【結語】*Candida* 属菌は、菌種により異なる薬剤感受性を示すため、菌種ごとに耐性化傾向を把握し、臨床への情報提供することが重要である。

連絡先：（0532）33-6111（内線 2227）